

灯籠の修復作業をする学生らと、来場者に説明する日高真吾教授（左から3人目）と中村晋也准教授（左端）＝穴水町中居で



中居鋳物の傑作 継承へ修復作業

穴水町中居の能登中居鋳物館に展示されている町指定文化財の鉄灯籠「明泉寺台燈籠」の修復作業が八日、館内であった。中居鋳物への理解を深めてもらおうと同館は無料開放され、住民らが十三年ぶりの貴重な作業を間近で見学した。

（小林大晃）

穴水町文化財「明泉寺台燈籠」

灯籠は二〇〇七年の能登半島地震で上部を支えるさおの部分折れ、国立民族学博物館（大阪府吹田市）の主導で三年をかけ修復された。修復はそれ以来で、今回はさび止め作業を中心とし、博物館の日高真吾教授（五）らスタッフ三人と金沢学院大の中村晋也准教授（五）のほか、学芸員資格取得を目指す同大文学部の学生三人が参加した。

七日から本格的な作業に取りかかり、細かなほこりを払い、乾きにくい性質の精製オリブオイルを付けて錆肌を丁寧に塗り込んでいった。来館した住民らは日高教授や中村准教授から灯籠の詳細などについて説明を受け、作業を見学。能登中居鋳物保存会員の竹野博正さん（八）は「灯籠は貴重な文化財。修復作業が見られる機会があるのは良いこと」とうなずいた。

日高教授によると、今後十年おきにさび止め作業が必要だという。灯籠は中居鋳物の傑作とされ、現存する中で最大の二百六十八号を誇る。江戸時代後期の嘉永二（一八四九）年の銘がある。

住民ら間近で見学